

# ソーシャルメディアは、ほんとうにソーシャルか？

公共性の残余をめぐる考察

大澤 真幸



Otsawa Masahiro

おおさわ・まさひろ／社会学博士。1958年生まれ。著書に『ナショナルイズムの由来』（講談社、毎日出版文化賞）、『不可能性の時代』（岩波新書）、共著に『ふしぎなキリスト教』（講談社現代新書、新書大賞）、二千年紀の社会と思想（太田出版）など多数。

「ソーシャル」とは何か。ここで「ソーシャル」というのは、ソーシャルネットワークというときのソーシャルである。この意味での「ソーシャル」は、ほんとうの（ソーシャル）かこれが問いたい疑問である。ただし、このような問いが成り立つためには、〈ソーシャル〉ということ、私が何を意味しているのか、明示しておかなくてはならない。その点は、すぐ後で述べるが、その前に、いささか興味深い、世界観の対立を見ておきたい。

昨2013年、日本の思想界では、ほぼ年齢の等しいふたりの若手の、つまり30歳代の若い論客の著書が大きな話題になった。鈴木健の『なめらかな社会とその敵』（勁草書房）と千葉雅也の『動きすぎたはいいけない』（河出書房新社）である。ソーシャルメディアを主題にしているわけではない、これら哲学的・理論的な著作に、今ここで注目することにほもちろん理由がある。両者がともに、ウェブ、とりわけソーシャルメディアにおける体験から、インスピレーションを得ながら書いていることが、明らかだからだ。つまり、二つの著作は、インターネットを積極的に活用している若い世代の、「ソーシャル」な体験を、哲学的・思想的に昇華した表現であると解釈することができるといえる。注目すべきは、ふたりの結論が互いにまったく反対を向いていることである。

鈴木健の著作は、「なめらかな社会」を実現するためには、どのような制度を設計したらよいのか、その基本を大胆にを奨励していたのだが、千葉の方は逆に、こう言う。切断せよ、と。孤立し、引きこもっていた方がよい、と言っているわけではない。接続過剰はよくない、適度に切断せよ、ある程度の壁を設けよ、というのが千葉の結論である。タイトルの「動きすぎたはいいけない」は「つながりすぎたはいいけない」と同義である。ウェブやソーシャルメディアを自在に使いこなしてきたと思われる、同世代のふたりの学者は、正反対の結論に到達した。この事実が、われわれに考えるためのヒントを与えてくれる。この点には、あとで立ち戻る。

ソーシャルメディアでつながり、壁や境界が取り払われた「なめらかな社会」か。はたまた、適度な壁を設けた「つながりすぎない」社会か。どちらをめぐれば、自由な精神が棲む、真に〈ソーシャル〉な社会が実現するのだろうか。

トは、このテキストの中で、「理性の私的使用／公共的使用」という区別を導入している。ここで、カントは、「私的／公共的」という対照を、普通の語法とは反対に使っている。カントによれば、ある人が何らかの共同体の一員として思考することは、たとえ公務員が公益のことを思って行動することは、理性の私的使用に属する。それに対して、理性の公共的使用とは、すべての共同体を横断する普遍性に基づいて考えること、コスモポリタン（世界市民）として思考することである。

## 〈ソーシャル〉であるとき、人は最も自由

さて、冒頭の問いに戻ろう。「ソーシャル」はほんとうに〈ソーシャル〉か。私が、真の〈ソーシャル〉と見なしていることが何かは、カントが「啓蒙とは何か」という有名なテキストの中で論じていることに依拠して説明することができる。カント

提案している。その制度の中には、独特な貨幣のシステムや、斬新な民主主義の手法が含まれる。鈴木は著作の方が、千葉のそれよりも、インターネットやソーシャルメディアとの関係は強い。思い切った単純化して言ってしまうと、鈴木がめぐらしているのは、ウェブ上のネットワークを、現実の世界に転換させたような社会である。そのような社会を、彼は「なめらかな社会」と呼ぶ。なめらかな社会とは、壁のない社会、人々がなめらかにどこまでもつながっている社会である。ウェブに国境や壁がないように、である。恣意的に壁が設定されると、われわれは、壁の向こう側の人をとりたてて憎んでいるわけでもないのに、その人たちとつながることができなくなる。なめらかな社会とは——もう少しだけいい言い換えれば——それぞれの人の好き嫌い、愛憎の度合い、友情や敵意の配分を正確に反映したネットワークになっている社会のことである。

千葉雅也の著作は、これとはまったく違うタイプの本だ。それは、ジル・ドゥルーズという、20世紀後半に活躍したフランスの哲学者について解釈した、学術的な著書である。ドゥルーズの哲学のある特定の側面を、いささか誇張して解釈しているのだが、これを読めば、千葉が、哲学（史）の研究者として一流であることがよくわかる。われわれは、ここで、千葉によって解釈されたドゥルーズの哲学に立ち入る必要はない。ただ、その解釈から導かれる結論が興味深い。鈴木は、壁を設けずに（好きな人と）つながること

共同体の一員として、共同体のために考えることが、どうして理性の「私的」な使用になるのか。特定の共同体のことしか考えていないからである。理性を私的に使用する時、人は、自分が好きだったり、自分と利害をともにする仲間や集団のことしか考えていない。別の見方をすれば、このとき、人は共同体のしがらみの中に拘束されている。それに対して、公共的に考えるということは、「どの特定の共同体のメンバーでもない者」になることを含意しているのだ、ある意味で孤独である。しかし、そのとき、人は、普遍的な社会の一員でもある。だから、公共的とされるのだ。ここで私が真の〈ソーシャル〉というのは、カントの「公共的」と同じ意味である。公共的であるとき、つまり〈ソーシャル〉であるとき、人は最も自由である。共同体のしがらみ、共同体のルールや規範、共同体の「空気」に支配されずにすむからである。ここで問いたいことは、ソーシャルメディアの「ソーシャル」は、このような意味での〈ソーシャル〉なのか、ということである。あるいは、「ソーシャル」には少なくとも〈ソーシャル〉へと向かう契機を含んでいるのか、ということである。

## つながるのか、断ち切るのか

たとえば、鈴木健の「なめらかな社会」は〈ソーシャル〉なのではあるまいか。なめらかな社会は、共同体を隔てる境界線や壁のない社会である。それは、無限に切れ目なく拡がるネットワークだ。その中の個人は、それゆえ、特定の共同体のメンバーとしてではなく、無限のネットワークの結節点として、それゆえ普遍的な社会のコスモポリタンの一員としてふるまっていることになる。つまり、なめらかな社会の中の諸個人は、定義上、カント的な意味で公共的になるまい、考えている、と見なしてさしつかえないのではないか。

鈴木健の考えでは、なめらかな社会は現実にはまだ存在しないが、インターネットやソーシャルメディアが形成す





1986年にフランスから発表され、日本でも話題となった傑作に理想的〈ソーシャル〉のイメージを探す。

悪童日記

アゴタ・クリストフ

だが、次のように考えたらどうか。壁を設定した上で、その内側ではなく、外側の者と交流するとしたら。内側を優先させれば、私的な共同体に過ぎない。しかし、外側との関係を優先させれば、それこそ、まさに公共的であり、〈ソーシャル〉ではないか。

しかし、これは、あまりに抽象的な主張だと思われるだろう。そこで、ひとつのイメージを提供しておこう。ハン

「彼女は死なずにすんで、幸運だったね」

双子の視点からとらえたとき、普段は親密にしている女中は、言わば、壁の内側の人である。それに対して、ユダヤ人は、壁の外側の他者だ。双子は、壁の内側の仲間よりも、外側の他者との関係を優先させている。双子は、ユダヤ人に親しみを感じたわけではない。親密な感情は、むしろ女中に対して抱いている。親密な他者をも平気で罰する残酷さ、いかなるセンチメンタルな思いとも無関係な、壁の向こうの他者への冷静な愛。私の考えでは、これが〈ソーシャル〉ということの実例である。ソーシャルメディアやウェブに、こうした関係性を実現する力はあるだろうか。ある、と私は確信している。

共同体を隔てる境界線や壁がないなめらかな社会。



動きすぎてはいけない

ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学  
千葉 雅也

過剰な接続を切断し、一定の壁を設けたつながりすぎない社会。

なめらかな社会とその敵

PICSY・分人民主義・構成的社会契約論  
鈴木 健

関係性の中には、それに近いものがすでにおおむね実現している。ウェブやソーシャルメディアの世界は（ほぼ）なめらかな社会である。たとえば、ソーシャルメディアを使えば、人は、原則的には誰ともつながることができる。つまり、誰をフォローすることもできるし、誰にフォローされてもかまわない。いずれかの個人の発言は、ときには、フォローし、フォローされるといふ連なりを經由して、つまり他者たちに次々と引用され反復されながら、ほとんど無限のネットワークの中をどこまでも拡散していく。このように、ソーシャルメディアやウェブの世界は、インターナショナルでコスモポリタンの社会を形成しているのだから、われわれは、これをほんものの〈ソーシャル〉と認定してもよいのではないか。

だが、ここで立ち止まって反省してみよう。ソーシャルメディアに参加すると、人は、次々と入ってくる夥しい量の情報が気になる。情報を追いかけたり、読んだりするのに忙殺されるのだ。また、自分の発言やつぶやきが読まれているのか、受け止められたのか、反復されたり引用されたりしているのか、「いいね！」と言われているのかどうか、要するに、総じて、何らかの意味で自分が承認されているのかどうか気がかりで、ほとんどがまんがきかなくなる。これは、カントが「公共的」という語で指し示していた状態とは、正反対ではないか。理性を公共的に使用する者は、普遍的な社会の一員でありながら、英雄的な孤独を保っている。その孤独が彼に精神の自由を与える。ソーシャルメディアにはまっている者の場合は逆である。彼または彼女は、多すぎるつながり、過剰なしがらみにがんじがらめにされ、自由の領域をどんどん狭めてしまう。

だから、今度は、千葉雅也は警告を発するのだ。適度に切断しなさい、と。接続過剰はよくない、と。とてもまっとうなアドバイスに思える。しかし、理論的にはすぐに反論したくなる。ならば、どのくらいが適切な水準なのか。過剰でも過少でもない、ちょうどよい密度・頻度の接続とは、

どのくらいのことをさすのか。切断せよ、と言っても、全部を切断して、完全に引きこもってしまうは、元も子もない。どのくらいつながっていれば、何人くらいと接続していれば、「ちょうどよい」水準ということになるのだろうか。

おそらく、過剰でも過少でもない、適切なレベルの接続などない。何人くらいフォローするのがちょうどよい、どの程度の頻度で投稿したり発言したりするのが適切だ、などという水準は、どこにもないのだ。ソーシャルメディアの接続は、過剰か過少かのいずれかしかない。ときには——理論的には奇妙なことと思われるだろうが——過剰と過少が同時に感じられさえするだろう。たとえば、ソーシャルメディアを始めたときには、まだ接続の数が少なすぎて、寂しく感じる。そこでフォローを増やしたりして、接続の密度や量を上げていくと、気がついたときには、過剰になっているのだ。ときには、わずらわしいほどに過剰なのに、同時に、「まだ足りない」という寂しさをも感じることもなるだろう。過剰なのに過少なのだ。適切な水準だけが存在しない。

そもそも、ソーシャルメディアの「ソーシャル」はほんとうの〈ソーシャル〉になりうるのか、という問題設定との関係で言えば、適当なところで切断してしまえ、という千葉の方法は、最初から失格である。〈ソーシャル〉であること、公共的であることは、どこにも恣意的に切断する壁がない、普遍的に包括的な社会の一員であることを条件としているからである。どこかで切断して、ある範囲の仲間を囲ってしまえば、それは、定義上、〈ソーシャル〉な世界とは言えない。

以上から導かれる結論は、こうなる。「ソーシャル」は〈ソーシャル〉にはなっていない、と。ソーシャルメディアが形成するネットワークは、確かに、とてつもなく大きい。しかし、それは、カントの意味での公共的空間ではない。ソーシャルメディアの世界は、カント的な観点から見れば、巨大だが私的な共同体、大きな「仲間内」である。壁が見え

ソーシャルメディアが持つポテンシャルへの期待

さて、そうすると、ソーシャルメディアが形成する世界に、公共性を、つまり〈ソーシャル〉なものを期待するのは、そもそも見当違いだ、ということになるのだろうか。そうしたものは、ソーシャルメディアには原理的に実現不可能だ、ということになるのだろうか。私はそうは思わない。ソーシャルメディアがはらむポテンシャル（潜在的な可能性）の中には、〈ソーシャル〉のための残余があるのだ。どこにそんな残余の可能性があるというのか。

鈴木健と千葉雅也の両方の議論によって取り残された論理的な可能性に、である。両者にとつて盲点になっている領域がある。一方に、切断する壁や境界線がない世界がある（鈴木健）。他方には、ところどころに、あるいはときどき切断が入る世界がある（千葉雅也）。この二つで、論理的な可能性は尽きているはずではないか。どこに余りがあるのだろうか。

ここで、コミュニケーションのネットワークをどこかで切断し、壁を設定すると考えてみよう。このとき、われわれは普通、壁の内側の人たちとだけ交流し、彼らと親密になる。壁の内側は、（私的な）共同体である。この壁を無限遠に設定すれば、鈴木健の「なめらかな社会」になり、近くに設定すれば、千葉雅也の世界になる。

ガリー出身の作家、アゴタ・クリストフに『悪童日記』という小説がある。この小説の主人公は、不気味な幼い双子である。小説は、この双子の一人称（ぼくら）の語りになっている。双子は、冷酷で、普通に考えると、「こんな悪い子はいない」と言っただけでいかに反道徳的である。彼らは、嘘をつき、他人を脅迫し、殺人すら犯す。だが、私の考えでは、この残酷な双子が他者（たち）とよりもつ関係は、〈ソーシャル〉ということの純粋な実例になっている。

たとえば次のようなケース。双子は、司祭の邸の女中と仲がよい。女中は官能的な若い娘で、双子は、女中と少しばかりエロチックな遊びをしたりしている。あるとき、その女中の前を、強制収容所へと連行されていくユダヤ人たちの列が通った。飢えたユダヤ人の一人が、「パンを」と言っ、女中に食物を乞うた。女中は与えるふりをして、パンを差し出し、ユダヤ人がもう少しでそれをつかみかけたところで、そのパンをさっと引き、自分の口に放り込んだのだ。「あたしだって腹ぺこなのだ」と言っ。これを目撃していた双子は、女中を罰することに決めた。暖炉用の薪の中に火薬を混ぜておいたのだ。女中が暖炉に火をつけたとたんに、それが爆発して、彼女の顔は、火傷でひどく醜いものになってしまった。これに対して、双子が言った。